

| | |
|---------|---|
| 氏名(国籍) | カジ ギャス デイン KAZI GHIYAS UDDIN (バングラデシュ) |
| 学位の種類 | 学術博士 |
| 学位記番号 | 博美第2号 |
| 学位授与年月日 | 昭和60年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第1項該当 美術研究科 美術専攻 絵画研究領域 |
| 学位論文等題目 | (論文) SPIRIT OF BENGAL (ベンガルの魂) (作品) BENGAL EMBROIDERY WORK 他64点 (ベンガルの刺繍 他64点) |
| 論文等審査委員 | (主査)東京芸術大学教授(美術学部) 芸術学士 中根 寛 (論文第1副査) 同教授(美術学部) 文学修士 後藤 狷士 (副査) 同助教授(美術学部) Dr.Phil. 越 宏一 (作品第1副査) 同教授(美術学部) 芸術学士 大沼 映夫 (副査) 同講師(美術学部) 芸術学修士 佐藤 一郎 |

論文内容の要旨

本論文は、1979年より1984年の間に制作した水彩絵具による絵画作品65点を主体とし、その写真およびその制作にあたっての芸術観・風土性の自覚・諸先輩からの影響・技法などを6つの項に分け、解説する文章から成立している。

これら掲載されている作品65点は、作者が東京芸術大学大学院美術研究科博士課程に入学後制作したものである。油画の制作に必要なエスキースとして常時数多く描かれていた水彩画の効果が、発想を表現し定着させる手段として、油画と比して自由であり、かつ適切であることを次第に強く自覚することになり、ここ3、4年水彩絵具による制作を研究活動の中心としている。

作品の様相は自由な形態の色面を組み合わせた抽象画であり、心象的な空間を表現しようとしている。色彩は、主として落ち着いた青色・緑色・褐色などであり、透明水彩絵具の、たっぷりとした水を含んだ柔らかな筆先によってできる顔料の拡散や凝集、さらに塗りを乾かしながら繰り返すことによってできる透明水彩特有の微妙な変化を、色面に与えている。

当然ながら、生れ育ったベンガルの風土を色濃く反映し、伝統的な民俗芸術の具体的な様式、形態、色彩などを意識的に取り入れている。

解説文は、6つの項から成立している。

『はじめに』

芸術の人間社会における位置について述べている。芸術は人間の精神の表現であり、芸術作品は、文字による歴史の記録に比べて、『生』の息づきや宇宙との対話の記録として、われわれにとってより重要、貴重なものであると、主張している。

『芸術作品は芸術家の深層経験が結晶化されたものである』

芸術家の創造は、『生』およびさまざまな情動が一つに結びついている状態の中で思考し、想像力を通じて意識的理性よりも直感によって、自分自身の外にある自然との同一性を認めることにより成立すると、述べている。そして、この唯一無二の人格が得た経験の結晶化である芸術作品によって、芸術家および彼の属する民族の経験、気質、宇宙に対するあり方までも理解することができると、述べている。

『芸術の源泉は自然にある』

芸術家は、自然を見つめることから視覚イメージを生み出すが、単なる引き写しではなく、みずからが見たいと欲するものを描き、自然の事物の偶発的に生じた欠陥や歪みを見分け、より完全な理想を引き出すと述べている。

『私の絵画は構成的かつ抽象的である』

みずからの作品について語ることは困難であり、むしろしない方がよい。芸術作品は、時代によって補われ、成長していく。作品を創った芸術家はその作品の一部に過ぎない。最終的な解答は常にその作品の中にあるとしながら、まったく答えないことにも不安を覚え、自作品についての感想を次のように述べている。

幼年時代の思い出、風に乗ってくるちぎれ雲、草木の繁み、澄んだ大気のもとの道、とうとうと流れる河、緑色に映える水田などの中に、イメージの内実を生の状態で引きだしている。しかし、そのまま受け入れるのではなく、知覚によるイメージはある秩序を必要とする。この秩序が私の『構成』である。これはまた種々矛盾した相反するさまざまな現実から人間こそがある秩序をもって、「かくあって欲しい」精神世界を形づくることに基づくものである。そして、みずからが描く線・形態・空間が、他者とのコミュニケーションのための最も直接的なメディアであり、みずからの心の状態とリズムの最もよき似姿であると、確信しつつ、それらの絶対性と正確さを選び出してきたと、述べている。さらに、芸術家の人間社会における使命・態度に言及している。

『私の絵画の源泉はベンガル民俗芸術にある』

「私は現在も展開し続けているベンガルの民俗芸術の創造過程の一反映に過ぎない」と断定し、

水の豊かな祖国を愛し、そこからインスピレーションを得ている。作品にはベンガルの伝統的芸術に見受けられる図案・色彩配合・イメージなどが反映され、時には意識的に取り入れていると、述べている。例として、刺繍の「カンタ」、祭りの時地面に描かれる「アリパナ」、村の専門画家ら「パテュア」が描く宗教絵画などの資料を提示している。

また、みずからとベンガル民俗芸術の係わり合いを考察し、西欧の現代作家であるパウル・クレーとペルシア芸術、またはパブロ・ピカソとアフリカ芸術との関係とに、みずからの場合も対応しているのではないかと、述べている。

『私の水彩画の技法』

実作品による制作過程を示し、主な留意点を次のようにあげている。

●透明水彩絵具の特性を生かすために、多量の水を使用する。 ●パレットには5色以上の絵具を並べない。 ●柔らかな黒テン毛の筆を使用する。 ●薄塗りを3～5回繰り返す、色面に変化を与える。 ●白色と黒色のみで仕上げる作品の場合を除いて、この二色は使用しない。黒は、黒以外の絵具の塗り重ねによって、白は紙の地を残すことによって得られる。

水彩画用紙は、バングラディッシュ製「ペーパーボード」、フランス製「ムーラン」、ドイツ製「ハーネミュレ」などを使用し、礬水引きされてない和紙は使用できない。